緑風の吹く大地で

矢羽　彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緑風の吹く大地で

【Ｎコード】
Ｎ５９４３Ｍ

【作者名】
矢羽　彩

【あらすじ】
十代の少年と少女の冒険物語。異世界のとある平和な村で過ごす彼らは何も知らないままで大人になるはずだった。しかし、突然の事態により旅路を行くことを余儀なくされる。ある日訪れた者たちによって非道なまでの世界の破滅を予感させられて――――。

第一話（前書き）

書いてほったらかしにしていた物語を進めるために、載せてみようと思います。
よろしくお願いします。

第一話

少年は一面緑に覆われた丘の上に立っていた。
眼下には日々の生命を紡いでいる村と生活のともである家畜がいるのが目にすることができた。

肩に一つの手荷物を引っ掛けている。少年の物はそれだけだ。
他には何も持ってこなかった。
最低限にまとめたものしか手にすることができなかったのだ。
本当に必要なものだけを抱えて彼はこの地へとやってきた。

けれども不足していたものがあった。
時間が足りなかったために、高価な薬を入れ忘れてきたのである。
薬がないうえに、疲労の溜まった体では回復が難しい。
これでは体調を崩しても、どうにもならなかったのだ。
薬草は彼の手元にはなかった。

そして、ただ静かに足元に広がる光景を見下ろす。

＊　＊　＊　＊　＊

「シリル！」
バン！
と結構な音を立てて扉を開け放つ。

いろんなところを駆けずり回って、あちらこちらを探しまわって、もうくたくただ。
ずっと走り続けて、彼の居場所を確認しているこっちの身にもなってほしいと思わずにはいられない。
軽く息を弾ませて、少女は辺りに目を配る。

視界を覆いつくすように広がる真っ白いカーテンが風に揺れて穏やかに波打つ。
白い壁に、木の床。
寝台の他には小さなテーブルが一つあるのみ。
少ない家具に、がらんとした部屋だった。

白いカーテンが上に舞いあがって、布の内側に隠していたものをあらわにする。
そこには窓があった。

それは室内の壁を一部大きく切り取ったかのように設計された窓。
窓は窓でも通常考えられる大きさのものではなく、青空を室内にいながらも贅沢に感じさせるようになっているサイズだった。

見方によっては、横長の長方形に切り取られた壁が青空に通じる道であるかのようにも思えるし、一作の巨大な絵をかけているようにも見える。
まるで壁にかかった一枚の大きな絵。
これが本物の空をみることができる窓だなんて本当に非常識も甚だしい。
そんな思いも吸い込まれそうな澄んだ青の前では、ただただ圧倒させられてしまう。

なんだかシリルそのもののような雰囲気のこの部屋に少女はしばし

我を忘れる。
ふと青空に引き寄せられて、窓の外をのぞく。
すると、家の外側の壁に長い梯子がかけられているのが少女の目に飛び込んできた。
梯子はそのまま屋根へと続いている。

あんなもの、いつの間に！

驚きに目を張らずにはいられない。
梯子なんて持っていたのか、とびっくりする。
何しろ物が少ないこの家で、今までお目にかかったことなどない代物なのだ。

はっと我を取り戻すなり、少女は窓際まで進めていた足を先ほどに自分が大きく開け放った扉の方へと急いで戻す。
部屋を出て、建物の裏へと回り、梯子に手をかけると腕に力をこめて足を引っ掛け、ずんずんとのぼり始めた。

次々と止まることなく少女は進み続ける。
すぐに梯子の段は終わって上に着いた。
右に左に、視線をさまよわせる。

かくして探し続けていた相手はそこにいた。

第一話（後書き）

タイトルは突発でつけたので、関連は微妙です。

第二話

シリル！！

声を大にして呼びかけようと口を開きかけたが、声を発することなく唇は閉ざされた。
少年のあまりにも静かに纏う温度がこの空気を壊させることを拒んでいるように少女の目には映った。

屋根の上で小さくまとまり、一心に空を見上げる少年の姿。
なんとも一生懸命で、頼りない。

少女もまた、瞬き一つにすら慎重になる。
音という音のすべてが空気がふるわせることに許可がいるような静けさの中、微動だにできなくなってしまった。

首を大きく反らし、顔ごと天へと向けて、真剣な表情で睨む。
苦しいように、もしくは何かに焦がれるように空を見つめるシリル。

その様子を目にしていた少女の胸で、唐突に意識する間もない速さの中で言葉が呟かれた。

空に還りたいの？

心でつぶやかれた投げかけを、実際にシリルに尋ねてみたい気がした。

脈絡もなく、何故そんな問いが自分の中で浮かび上がったのか、
それは少女にもわからなかった。

ただ、突然に宿された疑問。
結局、少年にその問いは発されることはなかった。
少女の胸中のみに、その疑念はしまわれたまま時は過ぎたのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

セルヴィス暦１７年　夏一の月
この国に、緑の風が吹くころ。
大地は十分に生命を感じさせ、人々はその恩恵に与る。

「シリル！！！」
確認のノックもなしに
ダン！
と勢いよくドアを開ける。
勝手知ったる他人の部屋へと遠慮なく入っていく。
すたすたと歩き寄ってきたのは幼馴染のラザトーシャである。
「仮にも村長の孫だろ。もう少し落ち着きっていうものを覚えろよ」
ちら、とラザトーシャに一瞥をくれるとそのままシリルは読んでい

た本に再度、視線を落とす。

「あら、シリルだってエイレオンおじさまの家族じゃない。なのに、何その行儀の悪さ」

ラザトーシャが言っているのは、シリルが机上の手前に思いっきり足をのせていることだろう。

シリルは、ラザトーシャに指摘されたことに対して一向に気にした様子をみせない。

むしろ逆にふてぶてしいくらいの態度だった。

「いつものことだろう。それよりなんだ？」

平然とした顔を崩さずに、目は文字を追う。

ぺらり、と紙がかわいた音を立てる。

手がさらりと紙の表面をなでるようにして、次のページをめくる。

シリルの言葉にそうだった、と思い出したラザトーシャは顔を輝かせる。

声に喜びまでもにじませて言う。

「あのねっ、今日中に王都一行が村にやってくるんですって！！」

耳に通るは、弾んだ声音。

鈴をいっぱい鳴らしたように元気な声が発したニュースは通常であれば明るい出来事であるはずだった。

けれども、シリルの反応はみんなのものとは違った。

表情はもちろん纏う雰囲気まで一瞬だけ凍ったかのようであった。

「王都一行・・・？」

確かめるように、一語一句ゆっくりと繰り返す。

その様子は歓喜には程遠いものだとラザトーシャにもわかった。
普通であれば、平民その他は王という高貴な身分の者などには憧れも強く、一目でもそのご尊顔を拝見したいという者が後を絶たないものである。
この国は恐怖政治であるわけでもないし、この時代の王政に不満の声は特に聞かない。

比較的平和なこの時代では、貴さある者にただ純粋に接したいという思いだけがあるようなのだ。
都の方でも似たような思いをもっているし、王族をみることができれば有難いという考えが根強い。

こんな田舎であれば、国の頂点に位置するような存在と同じ空間にい合わせることは全くない。
国の端のようなところにある村では、中央に位置する王都などで開催される行事にも出向くことは当然ないので、尚更その機会は乏しい。

だから今回のようなことは珍しい。
めったにないこの機会に一目、ちらりとでも目にする経験ができれば誇らしいし人々に自慢できる。
そんな単純な考えが人々の中では多い。
事実、ここにくる今まで知らせを伝え聞いた者たちは皆一様に喜びに近い感情を浮かべたし、そういった言葉を発したのだ。

そんな中での、このシリルの間逆ともいえる反応は一体なんなのだろうか。
まるで、恐ろしいものがやってきたみたいな・・・。

ガタッと音を立てて椅子から乱暴に立ち上がる。足は大きく空を跳ねた。
非常にその声は低かった。
不吉を感じさせる瞳の底光りと、また恐れを抱きつつも口をせずにはいられないといった様子で
シリルは再び、言った。

「王都、一行・・・だと」

第三話

ラザトーシャはシリルの緊迫した雰囲気に委縮してしまう。
いつも感情を大きくあらわすことをしないシリルだから、みんなのような反応は期待していなかった。
それでも、てっきりこのニュースであれば、シリルといえどもちょっとくらいは喜びの表情を見せると思ったのだ。
確かに感情の幅は大きく振れた。
けれども正直言って、この反応は予想外だ。
完全に期待していたものとは違う。

どうしてだろうか。
ラザトーシャにはシリルの考えていることが分からない。
何を思って、そのように驚いているのだろう。

わからないからラザトーシャは普通に無難なことを言うことしかできない。
ただシリルの外に向けられたわけでもないだろう言葉を拾って会話をするしかできない。

「そ、そうだよ？　今はガンダズの村にいるみたいなんだけど、先に前触れだけきて・・・・・・」

言葉を口にするごとにシリルの徐々に険しくなっていく表情にラザトーシャは不安を抱く。
わけがわからなくても負の感情は伝染する。
得体のしれないものに恐怖を覚える。

「なんか、こんな辺境の村は旅人もなかなか通らないようだしね。
今まで全く話を着かなったのも納得だよね」

急にしてきた寒気をごまかそうとラザトーシャは一人あはは、と笑うがひきつっている。
ねぇ、シリルと相槌を求めようとしてみれば、シリルの顔が歪むのが視界に映る。

「くっそ！　やられた！！」

拳を力任せに叩きつける。
木材でつくられた素朴な机が力を与えられたことよってきしむ音をさせる。
それを耳にしてラザトーシャは反射的にびくっと肩をすくませた。

いつも冷静沈着なシリルの見たこともない様子にラザトーシャは驚くばかりだ。
心臓は動揺して、どくどくと激しく脈打っている。
頭はぼんやりとして気ばかり焦って考えがまとまらない。
いったい何がシリルをこんなにも怒らせているか。

しんと静まり返った部屋。

荒れ狂う感情の片鱗をのぞかせると、自身を取り戻したのか頭の回転の速いシリルは何かを考えているようだ。
ラザトーシャはそんなシリルを見つめることしかできない。
茶化して空気を何とかしようなんて真似が通用する雰囲気じゃないことはもう感じ取っている。
できることは、邪魔をしないようにじっと息を殺す事だけ。

二人はそれぞれの思考の中にいて、微動だにしない。
音の止まった空間に、いつもの村にはない慌てたような、お祭りの前に浮かれたような賑わいの声が時折、耳に届く。

「ラザトーシャ、皆に荷物をまとめるように言ってくれるよう村長に伝えてくれ」

突然の言葉は、全くの予想外だった。
何を言われたのか一瞬、ラザトーシャにはわからなかった。
また、その台詞が何を意味するのか理解できなかった。
だから、すぐには何も答えることができず思わず「え？」と呟くように言ってしまっていた。

「水と食料。衣類。山を越えるため道具。野宿になるかもしれない。他にも色々要るな。エイレオンには俺が今から話に行くから、ラザトーシャは村長のもとへ行ってくれ」

「何を言っているの？　シリル？」
次々と展開されていく話についていけずにラザトーシャは困惑する。
茫然とつぶやかれた問いは考えることに没頭するシリルの耳には届かない。
構わず、己の問いをぶつける。

「今日のいつに王都一行は現れるんだ？」
「夜にはいらっしゃるそうだけれど」
これ以上聞いても説明はしてもらえなさそうだと察すると、仕方なくラザトーシャは答える。

「じゃあ夕方にはもう来るだろうな」
早くしなければ、とシリルは柳眉をひそめる。

「詳しいことを今は話している時間がない。とにかく一刻以内に用意をしないとまずい。皆のためにもラザトーシャ、村長に迅速なる伝達が必要だ」

わけもわからず先ほどから問いを向けられ、その上村長に伝達を必要とするので行ってきてくれという。
一切の詳細が不明で手掛かりとなるのはシリルの言葉だけ。
この話をどう受け取るのか。どう扱うのか。
時間はない。

シリルはふざけて、こんなことはしないともわかりきっている。
つまりこれは本気で切羽詰まっている事態であるということ。

シリルの差し迫った何かを感じさせる緊張感は紛れもなく本物だ。
真剣な表情に嘘はない。
指示をしながら、手当たり次第に必要と思われるものを入れて荷造りしている様子にもそのあわただしさが伝わってくる。
何かあるのだ。
そして、これは村全体の命にかかわることであるようだ。

ラザトーシャはシリルを信じている。

そうであれば、ラザトーシャのすることはただ一つ。
それは、すぐに動くことだ。

第四話

「わかった。今すぐ皆に伝えてくる。集合場所はどこがいい？」
面を上げて言葉をはっきりと言うラザトーシャ。
手を休めず、シリルは考えを告げる。

「とりあえず村からは離れた場所の方がいい。できるだけ安全で見渡しのいい場所が最適だな」
「じゃあ、サンチェスの丘でいい？」
「あぁ、いや。ゲインの森の方が見つかりずらいからそっちにしよう。丘では見晴らしがよすぎる」
「ゲインの森ね！」

脳内で同時にいくつものことを考えているシリルにラザトーシャは確認をとってから飛び出す。
身を翻すとスカートの裾がひらり舞った。

「頼んだ、ラザトーシャ」

走り出したラザトーシャの影にシリルはそういった。
背中はもう見えない。

「さて、と。俺ももう行くかな」

まとめ終わった荷物を背負う。
簡単に片づけた部屋を前に視線を全体に走らせる。

決して手放したくないものはもった。
あとはもう大丈夫。

荷物をまとめるのは何度目のことだろうか。
脳裏によぎった言葉を無視してシリルは自分が今の今まで過ごしたこの建物をあとにした。

＊　＊　＊　＊　＊

村中を少女は走り行く。
シリルに言われた通りのことをラザトーシャが伝えると村長はすぐさま顔色を変えた。
すると厳しい顔つきで村長は孫娘に頼んだ。
「ラザトーシャよ、わしはこれからやるべきことがあって手をはなせないから少し頼まれてくれないか」
「何？　おじいさま」
村長のかたい雰囲気にラザトーシャの背筋が知らず伸びる。
「わしもすぐ行くからゲインの森に先にみんなと行っていてくれ」
「すぐ来るのね？　わかったわ」
「それと、皆に伝えてきてくれまいか」
こうしてラザトーシャはまた走っている。

今日はいったいなんて日なの！
朝からずっと走ってばかりいるわ。

心の中で文句をつきながらも、決してそんなことは言える雰囲気ではない。
ラザトーシャの表情も自然と強張るままだった。

そして、次から次へと村の端から端まで同じ言葉を口にする。

「みんな、ゲインの森へ！　急いで荷物をまとめてちょうだい！！」
「はやく。できるだけ必要なものをもって！」
「話はあとよ！」
「不在の人はいないか確認を！」
「村長命令よ」

声を張り上げ、耳の遠い家には直接訪れていく。
こどもだけになっていたら親のもとへ行くように言い、場合によっては連れていく。

詳細を理解しているわけではないので、村の人々も一瞬怪訝そうな顔をするもラザトーシャの必死の声音に尋常ではない事態が起こりつつあるのではとすぐに言われたとおりにする。

畑を耕していたものは鍬を手に、果物をとっていたものは籠を抱えて、足早に家へと舞い戻る。
大慌てで、でもできる限り頭を回転させる。
瞬く間に小脇に、手荷物を。背に家財をのせてゲインの森へと急いだ。

目の端で皆にちゃんと伝わっているか様子をとらえつつ
また次へとラザトーシャは駆けた。

第五話（前書き）

かなり間が空いてしまいました^^;

第五話

炎が爆ぜる。
火の粉が舞う闇夜。

人々は一つの光源を囲むように大きな円陣となって一か所に集まっていた。

＊＊＊

馬の嘶きが空高く響いた。
蹄は大地を走り、土ぼこりがあたりをいっぱいにする。

「人っ子一人、見当たりません！」
「本当にいないのか！？」
「捜せ！」
「はっ！」

先についていたらしい恐らくまだ下級兵だろう者らがその若い声を張り上げて着いたばかりの上官に報告する。
その伝えを受けて指示を出す男に従って、皆々が村に散る。

ばたばたと同一の服を着た男たちが村の中を動き回る。
それをこの軍団の中で一番立派であろう甲冑を身に着け、冷めた目をした男が見据える。

とがった顎に高い鼻。そして瞳は何も映していないように見えた。
何を考えているのかわからない。
彼を評するのに使われる言葉はそういったものだった。
近づくのさえ躊躇わせるほどの空気を醸し出し、男は一人馬上にいた。

＊＊＊

じっと息を殺して、茂みに潜む。
物音を立てず、静かに気配を立って様子を伺っていた少年はそろそろ動くと兵たちに勘付かれないように後退し始めた。
その姿は森へ消えた。

「奴ら、捜していますよ」

背を屈めて足音を立てぬように細心の注意を払いつつ村のみんなが集まっているところに戻ると少年は開口一番にこう言った。

事の詳細はこうである。

まず王都一行が村にきて地方監察をするときいていたが、その要である代表ともいうべき王の姿は見当たらず、王族を載せているだろうそれにふさわしい馬車も無論見当たらない、
今、村に訪れているのは一般的な兵と馬のみ。
あとは一目見て何に使うのかがわかるもの。
きっと、あれは・・・・・。

「やはり贄なのか」
「そのための人狩りの可能性が高いですね」
「まったく、嫌になるな」
苦々しい顔で呟く村長とエイレオンを筆頭にして皆も口々に不安を口にする。

「なんと酷な真似ができるのか・・・・・恐ろしい」
「同じ人間とは思えんな」
「統治者なんて我々と同じ人間ではないだろうさ」

老齢の村長は村で生贄のために人を攫う仕業が国の所業と知って打ち震えていた。
信じられない、と国を信頼していただけにショックを受け止めきれないようだ。

村の他の人々も、黙し沈鬱な表情を浮かべているものが多い。
ある者は自らの世界に閉じこもるように両膝を抱えて座り込み、またある者らは家族で慰めあうように肩を抱いている。
他にも呆然と中空を見つめていたり、中央の火をにらみつけるように思いつめているものもいる。

今まで信じていた国に裏切られたのだ。
その衝撃は大きい。
本来ならば庇護してくれるはずの存在が自分たちに牙を向けた事実に皆、打ちのめされていた。

田舎も田舎。辺境といってもいいこんなところにある村では国に関する情報なんて大して入ってこなかった。
だから知らなくても当然だった。

それでも遠い王都に憧れのようなものはあったのだ。
淡い、まぶしい期待感が。
けれど、それも今や木端微塵に打ち砕かれた。

偵察に出た少年が口にする言葉はどれも、先に予想された事態を裏付けた。
一歩間違えば、自分たちはもっと悲惨な運命をたどっていた。
それから逃れられたのは唯一の幸運。
ただ、これからどうすればいいのか。不安に暮れてわからない。

今までだって何かたいそうなことを国がしてくれていたわけではない。
だけど、これから何に頼って生きていけばいいのだろうか。
今回のことで目をつけられやしないか。追われるのだろうか。
どっちみち命はないも同然なんじゃないのか。
所詮は管理されるべき側の人間だ。自由だと思っていてもそれは国が保障をしてくれていたからだ。
それを失った今、どうすべきなのか。
縋るべきものが見当たらない。
確かな存在が、足場が崩れていく音が聞こえるようだった。

「でもシリルのおかげで命は長らえたよ」

ぽつりと。
しかし、はっきりと。
重い空気が漂う中、その声は発せられた。
人々の耳に、声は響く。

「家はまた建てればいい。畑だって、家畜だって。またやり直すことはできるよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5943m/

緑風の吹く大地で

2010年11月25日11時57分発行